

# も く じ

読書への誘い<sup>いざな</sup>..... 1

《推薦図書》	《推薦者》	
『新訳 茶の本』 岡倉天心 著 大久保喬樹 訳	合庭 惇	4
『46年目の光』 ロバート・カーソン 著 池村千秋 訳	足立恒雄	5
『儒教と道教』 マックス・ウェーバー 著 木全徳雄 訳	今井弘道	6
『日本の近代化と民衆思想』 安丸良夫 著	梅田千尋	7
『戦争がつくる女性像 第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』 若桑みどり 著	太田昌国	8
『赤瓦の家 朝鮮から来た従軍慰安婦』 川田文子 著	長 志珠絵	9
『戦後日本の歴史認識』 五百旗頭 薫 他編	加々美光行	10
『ははがうまれる』 宮地尚子 著	金井淑子	11
『パウロリーノ (上・下)』 ウンベルト・エーコ 著 堤 康徳 訳	國生雅子	12
『翻訳語成立事情』 柳父 章 著	小島 立	13
『旅愁 (上・下)』 横光利一 著	最首 悟	14
『ロボット (R. U. R.)』 カレル・チャペック 著 千野栄一 訳	斉藤日出治	15
『ユダヤ人問題に寄せて／ヘーゲル法哲学批判序説』 カール・マルクス 著 中山 元 訳	酒井隆史	16
『奇想の系譜 又兵衛一國芳』 辻 惟雄 著	谷川晃一	17
『なぜと問うのはなぜだろう』 吉田夏彦 著	丹波博紀	18
『科学の限界』 池内 了 著	内藤 酬	19
『ぼくを探しに』 シェル・シルヴァスタイン 著 倉橋由美子 訳	中竹竜二	20
『思想のドラマトウルギー』 林 達夫・久野 取 著	野家 啓一	21
『自白の心理学』 浜田寿美男 著	能川元一	22
『社会認識の歩み』 内田義彦 著	花崎皋平	23
『ポケットに名言を』 寺山修司 著	原田佳夏	24
『死の島 (上・下)』 福永武彦 著	東島 誠	25
『新版 きけ わだつみのこえ 日本戦没学生の手記』 日本戦没学生記念会 編	福島泰樹	26
『非ユダヤ的ユダヤ人』 アイザック・ドイッチャー 著 鈴木一郎 訳	藤田 進	27
『近代天皇論——「神聖」か、「象徴」か』 片山杜秀・島蘭 進 著	本郷真紹	28
『苦海浄土 わが水俣病』 石牟礼道子 著	松永智子	29
『いかに世界を変革するか マルクスとマルクス主義の200年』 エリック・ホブスボーム 著 水田 洋 監訳	水田 洋	30
『サド侯爵夫人』 三島由紀夫 著	水野和夫	31
『方丈記私記』 堀田善衛 著	武藤一羊	32
『身ぶりとしての抵抗 鶴見俊輔コレクション2』 鶴見俊輔 著	森 元斎	33
『国土の変貌と水害』 高橋 裕 著	山下三平	34
『ヤシガラ椀の外へ』 ベネディクト・アンダーソン 著 加藤 剛 著	李 成市	35
『九月、東京の路上で 1923年関東大震災ジェノサイドの残響』 加藤直樹 著	李 孝徳	36
バックナンバー.....		37

## 河合文化教育研究所

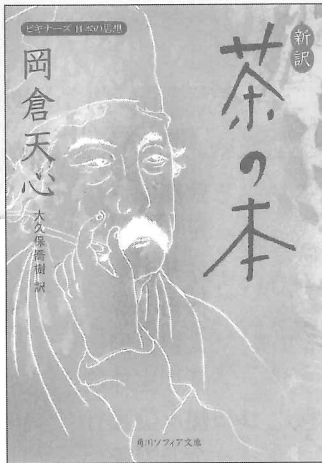
河合文化教育研究所について 42

主任研究員 44

出版 河合ブックレット・単行本 49

研究会紹介 51

主任研究員の著書から大学入試問題が出題！ 52



# 新訳 茶の本

おかくらてんしん 岡倉天心 著  
おおくほたかき 大久保喬樹 訳

角川ソフィア文庫 [定価: 本体680円+税]

## 推薦 合庭 惇 (あいば・あつし)

国際日本文化研究センター名誉教授。岩波書店『思想』編集長などを経て静岡大学情報学部教授、国際日本文化研究センター教授を歴任。

著書: 『デジタル羊の夢——マルチメディアとポストモダン』(河出書房新社)、『デジタル知識社会の構図——電子出版・電子図書館・情報社会』『情報社会変容——グーテンベルク銀河系の終焉』(産業図書)、『ハイデガーとマルクーゼン——技術とメディアへの問い』(せりか書房)など。

明治期の文部官僚として美術行政において活躍した岡倉天心(1862-1913)は、東京大学における恩師アーネスト・フェノロサとともに、明治維新後の日本国家の近代化の裏側で忘れられようとしていた古代以来の伝統芸術の再発見と保護に尽力した。彼は西洋美術一辺倒に傾こうとする画壇を相手に、日本美術の復興を目的とする東京美術学校(今日の東京芸術大学美術学部の前身)を創設し、みづから校長として采配を振るうとともに日本美術史の講義も行った。

彼がフェノロサとともに奈良の法隆寺を調査のために訪れて、僧侶らが仏罰による落雷を恐れて開扉を拒んだにもかかわらず、秘仏である夢殿の救世観音の公開に成功したように、強引とも言える手法で美術行政を引っ張っていったのだ。なお天心は自著で、このときの感想を「一生の最快事なりというべし。幸いに落雷にも遭わざりき」(『日本美術史』)と記している。

しかし彼の前には、海外留学から帰国した黒田清輝らの西洋派が美術学校の運営を巡って立ち塞がるなど、文部省内部にも反対派が多く存在していた。フェノロサがボストン美術館から招聘されて帰国してからは、天心の活動の場は、美術学校で学んだ横山大観らの日本画家たちとともに創立した日本美術院だけであった。

だが、フェノロサや海外の友人たちの応援もあって、天心の活躍は海外が中心となり、幼少の折に横浜の外人居留地で身に付けた得意の英語力と国際感覚が幸いして、講演や著作の出版で名声も高まった。1906年にニューヨークで出版された本書『茶

の本』も、天心みづからが英語でおこなった連続講演の原稿にもとづくもので、刊行以来、版を重ねるとともに日本語への翻訳も何度か試みられてきた。

天心は広く言えば東洋美術の専門家であるが、海外での彼の活動は日本や中国の美術を個別的に紹介するのではなく、東洋と西洋との障壁を芸術の立場から越えていくものであった。日本での美術行政をめぐる権力闘争に倦んだ天心の心境は、幼い頃から親しんできた漢学などの伝統的文化を、東洋という広い地理空間において捉え直し、さらにはそれを西洋文明と対比させた上で、より高い次元での芸術の価値を追求することであった。

『茶の本』の冒頭において天心は、“religion of aestheticism—Teaism”(芸術至上主義の宗教、すなわち茶道)という定義を示している。今日、私たちは一般に喫茶の儀礼を茶道と呼び、その英訳を“tea ceremony”としているが、天心はTeaismという言葉によって喫茶の習慣・儀礼に特別な価値を付したのだ。

中国の禅仏教に起源を持つとされている茶道であるが、天心はさらに中国の伝統宗教である道教の影響を強調する。道教は老荘思想と結びついて儒教との関連で語られるが、その起源は老荘よりもさらに古く、歴史を通じて中国の人々に根強く信仰されてきたと天心は語る。このように本書には天心のユニークな思想が盛り込まれていて、茶を素材にした「自由人」天心の面目躍如のエッセーである。茶道や伝統芸能に加えて和食まで持ち出して「おもてなし」が語られる現今、その歴史的・美学的背景を探るに好個の一書と言えよう。